

— 分科会 —

幼稚園



(財) 日本学校体育研究連合会

第 1 分科会

長野県短期大学付属幼稚園

第 1 分 科 会

研究主題

自ら運動することが好きになり、

思うように身体を動かす心地よさを味わえる運動遊びのあり方

～ 本園の伝統的な運動遊びの見直しを通して考える ～

た ん き だ い が く ふ ぞ く
長野県短期大学付属幼稚園

日 程

9:00 9:30 11:30 12:00 13:00 13:15 14:15 14:45 15:00

受 付	公 開 保 育	移 動 ・ 準 備	昼 食	開 会 行 事	研 究 発 表	研 究 協 議	指 導 講 評	閉 会 式
--------	------------------	-----------------------	------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-------------

公開保育内容

4 歳児 運動会ごっこ「ソーラン節」など

保育室、園庭

5 歳児 ボール当て鬼ごっこ「バクダンゲーム」

遊戯室

学校所在地



交通機関

○最寄駅

長野電鉄「本郷駅」下車 徒歩 10 分

○経 路

長野駅

↓ 所要時間 6 分

長野電鉄「本郷駅」下車

徒歩 10 分

学 校 概 要

幼稚園名	長野県短期大学付属幼稚園		
園長名	立浪澄子		
学級数	3学級	園児数	54名
所在地	〒380-8525 長野市三輪8-49-7		
連絡先	TEL 026-232-4212 FAX 026-232-4212		

【学校紹介】

本園は、長野県短期大学に児童科（現幼児教育学科）が新設されたことに伴って設置され、創立46周年の県内唯一の県立幼稚園で、園児数は3歳児14名、4歳児18名、5歳児22名の3年保育の園である。短大の敷地内に立地する為、市街地に近い割には自然に恵まれた環境にある。自らの力で豊かな人生を切り開いていける人間像を願って、異年齢の関係等の“人とのかかわり”を保育の柱として、「自立した子ども」「意欲的な子ども」「思いやりのある子ども」を教育目標に、自主的、協同的な『遊び』を大切に保育をしている。

また、保護者同士のかかわりも活発で、教育への関心も高く、母親の自主サークルや父親の「おやじの会」等、OBを含めたクラスや学年を越えた「つながり」が、子育てをサポートしている。

○教育目標(めざす子ども像)

<自立した子ども>

子どもの自立心は周りの大人や仲間との豊かな人間関係に支えられて育つ。また身体的、技能的なことができるようになる過程では、以後の児童期や青年期に続く「精神面での自立心」も育つので、幼児期には身体・技能面での自立を促しながら、精神面でも自立できるような援助を心がけている。

<意欲的な子ども>

意欲は自分なりの目標をもってやってみることで育つ。園ではひとりひとりの興味や関心にあった活動を十分保障することで育つようにする。

<思いやりのある子ども>

思いやりは「仲良くしよう」等と言葉だけでなく、温かな人間関係がもとになって自然に育つものである。保育では、このような環境を作ることが大切だと考えている。



1 研究主題

自ら運動することが好きになり、思うように身体を動かす心地よさを味わえる運動遊びのあり方
～本園の伝統的な運動遊びの見直しを通して考える～

2 主題設定の理由

○全体研究とのかかわり

幼児期は生涯にわたる人格形成の基礎を培う時期であり、運動においても、幼児一人ひとりの特性に応じて、身体を十分に動かし、運動する楽しさを味わえるようにしなければならない。しかし、近年は社会状況等の変化により、遊びの中で思いきり身体を動かす経験が減少して、その楽しさを経験できず、進んで運動しようとする態度が育ちにくかったり、咄嗟の時に身の安全を守る等の、年齢に即した身体機能の発達が十分でなかったりする姿が見られる。

このような状況は、本園の子どもたちも同様で、全体的には活発で身体を動かすことが好きな子どもが多いものの、中には失敗することを気にして、興味があってもなかなか動き出せない子どもも見られる。

また、幼児は生活全体を通して、様々な運動を主体的に経験しながら総合的に成長するよう促すことが大切であるが、幼児のうちから、特定のスポーツだけに取り組むといったような偏った経験のさせ方も増えてきている。そのためか、結果にこだわるあまり、自己肯定感が育ちきれずに、苦手意識を持ってしまう子どもがあるように思える。

そこで、一人ひとりの心身の発達や興味関心に違いが大きい幼児は、ルールや動きが決まっているスポーツではなく、遊びとしての運動の中で、それぞれが自分なりのおもしろさを十分追求していくことが、やがては自ら運動することが好きになり、それらの積み重ねにより、自分なりにイメージを持って身体を動かすことにつながるのではないかと捉えた。

遊びは楽しさを求めていく活動である。子どもは楽しくなければやらないし、熱中することもない。しかし、楽しいからこそ夢中になり、繰り返し取り組んできたことによって、身体の動かし方や身のこなし方、さらには達成感を感じ、内面的にも変化が見られてくるのだろう。このような姿が、思うように身体を動かす心地よさを味わえているということではないだろうか。

以上のように、幼児期には個々の子どもに合った遊びを通して思うように身体を動かす心地よさを味わうことが、競技としてのスポーツだけではなく、生涯を通じ心身共に健康で豊かなスポーツライフを実現するための基礎となると考えた。

○本園の教育目標から

本園の教育目標は「意欲的な子ども」「自立した子ども」「思いやりのある子ども」であり、それぞれを次のように考えている。

<意欲>

本園では、意欲を感情面だけで捉えるのではなく、具体的な「目標を持った活動」とつなげて考え、それを「意欲的活動」としている。意欲的活動により、その目標を達成し、達成感や効力感を得ると、さらに新たな目標へとつながって、意欲的活動が繰り返される。つまり、十分に遊びを追求し、次々に目標を見出して意欲的に取り組むようにすることが子どもの意欲を育てることとなる。

<自立>

自立とは単に自分のことが自分でできるだけでなく、周りの人との関係を土台にして、それに支えられながら、自分の力を発揮することだと考える。このような育ちには、友だちや教師と一緒に活動する中で自由に自分を表現できるような人間関係に支えられて、頼ったり助けてもらったりしながら次第に自立していく。このように、自立は依存を基礎として育つと考えている。

<思いやり>

思いやりは相手に親しみを持ち、相手の気持ちをくんだり受け入れたりすることである。それは、人に優しくされたり、受容されたりするような温かい人間関係の中で育つと考えている。

以上のような教育目標の達成につながってきたと考えられる活動の中に、本園で毎年受け継がれてきた「伝統的な運動遊び」がある。これは、クラスや学年を越えて、異年齢や同年齢の子どもから子どもへと伝達されながら再現され、充実した活動となって繰り返されてきたものである。そこではいつもほとんど全員の子どもたちが、主体的に活動に取り組む姿が見られる。そこで、本研究では、このような伝統的な運動遊びには、研究主題の達成へとつながる要素があり、それを実践の中で明らかにすることで、幼児の運動遊びのあり方を考察することにつながると考えた。

<伝統的な運動遊びについて>

「伝統的な運動遊び」というと、ややもすると「日本や地域などに伝わっている伝承遊びや、わらべ歌遊び」などと混同されることも考えられるが、本園の研究における「伝統的」とは、この園で「子どもから子どもへと受け継がれ、繰り返されてきた運動遊び」と考えている。

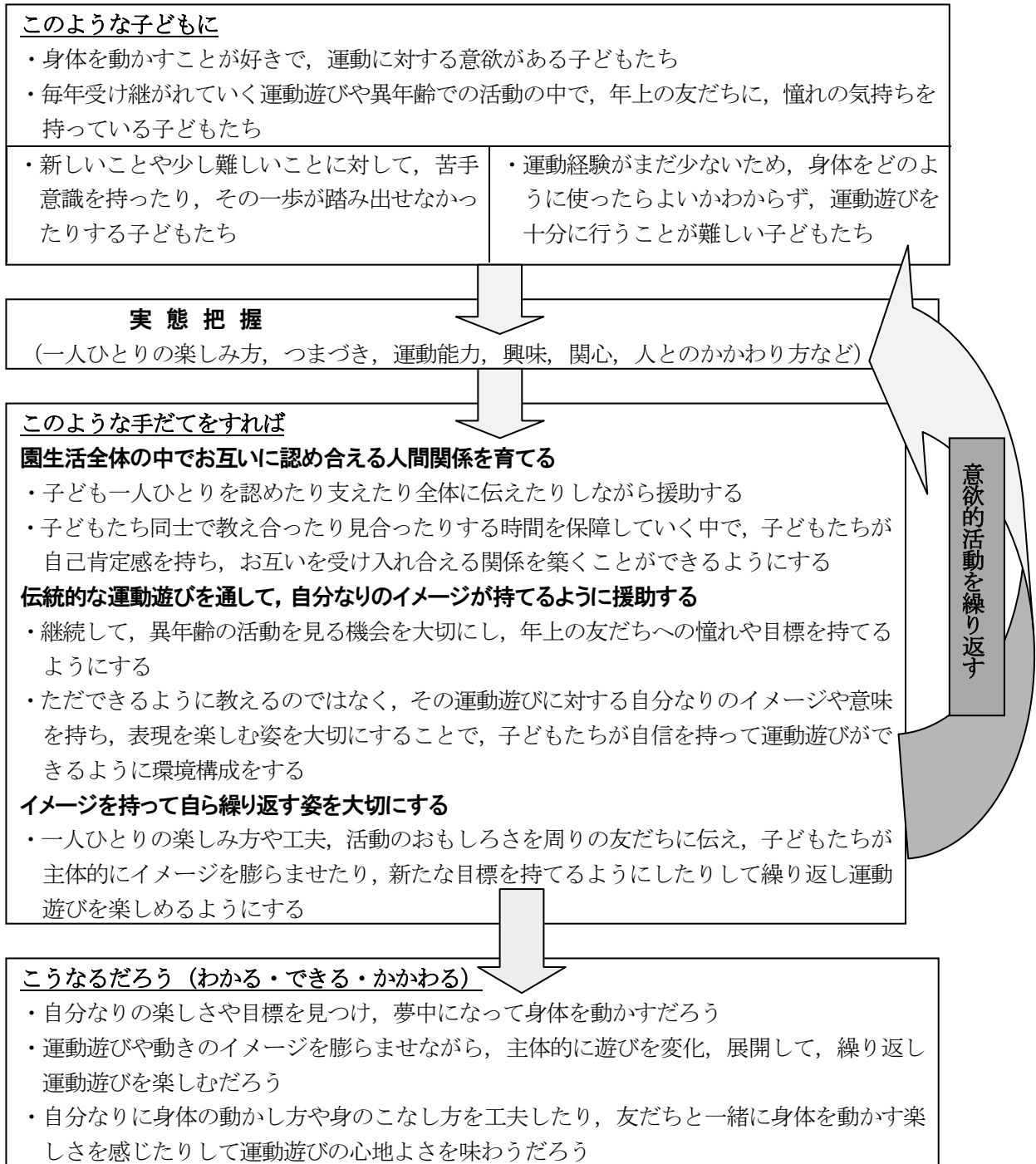
そこでは、年上の子どもたちの充実した活動の姿を年下の子どもたちが見ることによって、遊び方や魅力が伝わり、年上の人への憧れや目標が持てることにつながり、子どもたちが自然に遊び始めたり、やりたがったりする気持ちを高める原動力になっていることを感じる。さらに、興味を持ったところを繰り返しながら、自分たちなりのおもしろさを追求し、遊びを充実させていく。そうした充実した姿がまた、次の学年の子どもたちに受け継がれていく。

本園の伝統的な運動遊びには、次のようなものがある

プール遊び・缶ポックリ・渡り鉄棒・リレーごっこ・ソーラン節の踊り・バクダンゲーム（ボール当て鬼ごっこ）・高鬼氷鬼（高鬼と氷鬼を合わせたもの）・戦いごっこ（「ダンブえんちょう やっつけた【古田足日・田畑精一 作：童心社 出版】の絵本」の海賊ごっこが基本）等



3 研究の仮説



4 研究の重点

すべての子どもたちが意欲的に活動できる、伝統的な運動遊びの特性や魅力を捉え直すことで、子どもの「わかる、できる、かかわる」を引き出す環境構成のあり方を探る

5 研究の内容と実践事例

事例1 4歳児

『自分のイメージを膨らませながら自信を持ってソーラン節を踊るようになった T 男』

<ソーラン節について>

運動会のダンスと言うと、毎年違うものにする園が多いが、本園は毎年ソーラン節を踊っている。これは、運動会後に3・4歳児が5歳児の踊りに憧れて、バチを手に一ヶ月以上も繰り返したり、年長組になったら自分も踊れるのだと目標になっていたりする姿から、子どもたちにとって非常に魅力的なものなのだと感じて、全園児で踊るようになって20年近くになる。



音楽は民謡を行進曲風に編曲したものを使う。年齢によって踊り方が同じ部分と違う部分があり、全体の隊形も3回変化する。3歳はうちわ、4歳はボンボン、5歳は塩ビ管のバチを手に持ちハッピーを着て、大きくかけ声をかけながら踊る。

T 男は行動がゆっくりで、普段から身体を動かして遊ぶことが少なく、休みの日には、家でほとんどゲームをして過ごしている。初めてのことに緊張や不安を示すが、こま回し、製作活動など、興味を持ったことに対しては、根気よく取り組む姿が見られる子どもである。

【表記：太字…T 男の様子 囲み…教師の気づき、読みとりなど】

<ソーラン節を踊り始めた頃の様子>

今年も運動会の時期が近づき、年少時から聞き慣れていた「ソーラン節」の音楽がかかると、ほとんどの子どもが、部屋にあるバチで年長児の踊りを踊り、「そーれ!」「やあ!」等のかけ声をタイミングよくかけたりと、昨年の年長児の踊りをよく覚えている子どもたちの姿に驚かされた。T 男も曲がかかると、バチを持った手を交互に力強く振り、目の前に太鼓があるような仕草でたたく真似をして、ソーラン節の雰囲気を楽しんでいる様子であった。

年中時になって初めてソーラン節の音楽を流した時に、ほとんどの子どもたちが、年少の時の踊りではなく、年長児の踊りをし始めたのは驚きであった。しかし、昨年運動会が終わった後に年長児からバチを借りて、飽きずに踊っていた姿から、年上の子どもへの憧れを持ち続けていたことがわかった。運動会後も継続して踊りを楽しんできた T 男にとっても、ソーラン節は親しみのある、取りかかりやすいものであったと言える。

<新しい動きに戸惑う T 男と教師のかかわり>

その後、今年は年中組ではボンボンを持って踊ることを知らせたり、年長のペアの友だちに回る方向、隊形移動など新しい動きを教えてもらいながら、クラスでも何度かソーラン節を踊っていった。そんな中で、T 男はみんなよりテンポ、かけ声がずいぶん遅れてしまったり、どの方向に動いていいのかわからず戸惑い、ペアの年長児の後について歩く姿が見られた。この時、教師自身に、

「運動会までに覚えられるだろうか」「踊りがそろうだろうか」というあせりがあったように思う。つい、間違った向きや動きをしている部分に目が行き、こうだよと覚えられるよう、やって見せたり、「T 君はこっちへ行くんだよ」というようななかかわり方であった。そんななかかわり方をしていた時の T 男を見ると、意欲的な姿や楽しそうな様子は感じられず、ソーラン節を踊り始めた時のように、バチを持ってのびのびと身体を動かす姿はなかった。教師が「こうだよ」と教えるような一方的なかかわりでは、身体を動かすことが好きになるどころか、自信をなくしてしまうのではないかと反省した。

初めてのことに不安を示す T 男にとって、新しい踊り方や友だちと移動することに、「難しいな」という気持ちがあったのかもしれない。本来ならば、テンポを気にすることなく、ソーラン節の踊りそのものを楽しんでいる T 男の姿こそ、本当の姿であり、大切にすべきであったのではないか。

＜船をこぐイメージを持ってソーラン節を踊るようになった T 男＞

そんな中、全体練習が始まり、年長の教師から子どもたちに、ソーラン節は魚を獲る時に歌った歌であること、うちわで風を起こしたり、ボンボンで元気を出したり、大漁を願いながらソーラン節を踊るんだという話があった。部屋に戻ってからも、ソーラン節を踊る時にその話を思い出しながら、子どもたちと話をすると、「ジャンプするところは魚が獲れて喜んでたんだね。」「はじめは船をこいでいたんだね。」「トンパー（うちわを閉じたり開いたり）は風を起こしていたんだね。」などの声があがった。その言葉から教師は、子どもたちが、ソーラン節の踊りの一つひとつの動きの中に、魚を獲る船のイメージが持っているのではないかと感じた。教師から教えるのではなく、子どもたちから出てきたイメージを取り上げていくことで、子どもたちが「やってみたいな」「おもしろいな」と感じるのではないかと考えた教師は、一人ひとりが自分の好きな船で魚を獲りに行こうと提案してみた。すると、「ぼくはポケモン号だよ」「高速の船で速いんだよ」「私はプリキュア号にする」等、それぞれ自分の船をイメージしたようだった。T 男にも「どんな船にする？」と聞いてみると「レスキュー隊号だよ、大きな船」と言って手足を大きく動かし、力強く船をこいでみせる姿があった。教師は、T 男のイメージしたものがさらに具体的な動きにつながるのではないかと思い「レスキュー隊だから困ってる船を助けなくちゃ！」と言うと、T 男は急いで船をこぐ真似をしたりもした。こうして、ソーラン節を踊る前に、「今日も自分の船でたくさん魚を獲りに行こうね」と声をかけると、どの子も明るい、楽しそうな表情をし、踊る度に、「もう 100 匹釣れたよ」「サバとくじらが釣れたよ」「たこが釣れた」等と言いに来る子どもが増えていった。このように、T 男や子どもたちは、自分が考えた船で魚を獲るというイメージを膨らませながら踊ることに楽しさを見つけたようであった。



年長の教師の話をきっかけに、子どもたちは、ソーラン節の動きに意味があることを発見したようだった。この発見も、昨年から年長児の踊りを見て慣れ親しんできたソーラン節だったからであり、さらに自分なりの船をイメージしやすかったのではないか。また、クラスの中で「船に乗って魚を獲りに行く」と具体的なイメージを共有できたことも、子どもたちが主体的に動く要因となったのではないか。T 男も、自分の好きな「レスキュー隊」「大きな船」のイメージを持ち、

教師の言葉がけによって、手足を速く動かす、強く大きく踏み込む等、いろいろな動きを経験し、遊びの中で自然と身体を動かすことへの抵抗感がなくなってきたのではないかと考える。

<考察>

- ・ 普段から身体を動かすことが苦手な遅れをとってしまうT男に対し、初め教師は、「みんなと一緒に踊れるようにならなくては」という意識が働き、こうするんだというような指導の仕方であったことを反省し、どうしたらT男が主体的に活動に取り組めるかを考えた。そして、子どもたちが、ソーラン節の動きの中に、魚を獲るイメージが持っていることに注目し、T男の自分なりのイメージが膨らむよう、また、ソーラン節を踊るのが楽しいと感じられるような環境を構成していった。そして、T男は自分のイメージを持つことができ、自分なりに具体的な動きを表現していった。また、クラスで共通したイメージを持つ中で、友だちからの刺激を受けながら、自分らしく表現し、自信を持っていった。これらのことが、繰り返し身体を動かす原動力となって、動きに強弱や速さをつける等、身体のいろいろな部分を進んで動かすような変化も見られたと言える。

- ・ 毎年、年上の子どものソーラン節を見てきた伝統的な活動の要素も、子どもたちにとって、ソーラン節は取りかかりやすく、イメージが持ちやすかったと考えられる。さらに、クラスの中で「自分の船で魚を獲りに行こう」という共通のイメージを持てたことも、子どもたちが意欲的に、継続的に身体を動かすことの要因になったのではないかと考える。

また、自分の好きなところを何度も繰り返し踊ったり、楽しいと感じているところを教師が認めて共感していくことにより、それが自信となり、自ら身体を動かすことが心地よいと感じることにつながっていったのではないかと考える。

事例2 5歳児

『水に対する極度の抵抗感を、友だちに支えられて乗り越え、潜れるようにまでなったM子』

<プール遊びについて>

本園の5歳児のプールの活動では、『伏し浮き（子どもたちはお化け浮きと呼んでいる）』ができるようになることを目標に取り組むが、具体的に目指す姿は、『身体の力を抜いて、水の中で自由に身体をコントロールできるようになること』である。そのためには、まず昨年の経験を思い出し、水遊びの楽しさを再び感じられるように、お地藏さん（片方がお地藏さんのように構え、もう片方が水をかける）や洗濯機（プールの中で皆で反時計回り、もしくは時計回りに走って流れを起こし、カウントダウンに合わせて飛び込んでみたり、ワニ歩き等で水の流れを身体で感じてみたり）等をする。そして、教師が伏し浮きを実際にやって見せたり、昨年の年長児がやっていた姿を思い出させたりしながら、それに興味を持てるように働きかけていく。その際、友だちから刺激を受けたり励まされたりして、自分から意欲的に挑戦できるようにする。しかし、中には、まだ水



に対して抵抗感がある子どももいるので、水のかけ合いっこ等をしながら、顔に水がかかっても平気になるようにしていく。その上で、水の中に顔を入れたり、手足を伸ばしたりして脱力できるように指導する。そして、友だちの頑張りに気づかせたり、お互いに教え合ったりして、目標に挑戦しようとする雰囲気作りを心がける。活動の後半では、皆で今までの成果を見合ったり、まだ伏し浮きができない友だちがそれに挑戦するのを励まし合ったりするような機会を大切にしていって、それぞれに自信を持たせる。また、プール納めでは、それぞれの学年ごとに、プールの活動を通してできるようになったことや、楽しんできたことを披露し合う。

M子について、経験不足のためか身体の動かし方がぎこちなく、運動遊びは苦手な傾向がある。しかし、友だちの姿から刺激を受けて苦手なことにも自分からやってみようとするなど、積極的に運動遊びに参加する姿が見られる。また、友だちに対する親しみを持っており、自分のことよりもまず相手や周りのことを考えて行動するようなどころがある子どもである。

【表記：下線…教師の願いや気づき、そして指導の意図など】

<とにかく水が怖いM子と教師の願い>

6月下旬、プール開きをしてからしばらくは、とにかく水が怖い様子で、自分に水がかからないようにプールの隅の方へと逃げるようにしていた**M子**。顔に水がかかろうものなら、顔を背け、のけぞっていくほどだった。また、プール後のシャワーでも、頭からかけられると暴れて嫌がるくらい、抵抗感を示していた。しかし、プールの活動そのものを嫌がることはなく、ワニ歩き（顔をつけないでプールの底に手をつき、足を伸ばしながら進む）等をしながら、気持ちよさそうに取り組んでいた。それでも、身体は硬く緊張しているのでリラックスしながらプールの活動を楽しむことはできていなかった。教師は、そんな**M子**の姿から、時間はかかるだろうが少しずつ怖さを取り除いたり、苦手なことを克服させたりしながら、自信を高められるように援助していきたいと思っていた。

<様々な働きかけを試みる教師と、まだまだ水が怖いM子>

具体的には、水のかけ合いっこをしたり、『お地蔵さん』に誘ったり、時には、水に浮く感触や気持ちよさを味わえるように、教師がM子の手を持って引っ張りながらプールの中を歩いたり、やってみると自然と顔に水がかかり、そのうち次第におもしろくなって平気になるのではないかと考え、プールの底の雑巾がけごっこを取り入れてみたりした。また、少しずつでもできるようになっていく変化を実感し、それが自信につながればと考え、毎回顔つけに挑戦する時間をとり、個別にかかわっていた。実際の**M子**の姿としては、お地蔵さんは自分から「やる！」と言って参加するのだが、水をかけられているうちに身体がのけぞっていつてしまう、教師に手を持ってもらっていても怖さから腕の力は抜けず伸びない、雑巾がけごっこもやってみるのだが、顔にかからないように必死に顔を背ける、顔つけも促されてやってみるが口や鼻の辺り



を一瞬水面につけるので精いっぱい、という状態だった。顔つけに関して、教師はその都度「1秒できたね！」とM子なりの頑張りを認め、「1秒できたから、今度は2秒頑張ってみようか」と励ましていた。そんな様子を見て、周りの友だちが「こうやってやるんだよ」とやって見せてくれたり、応援してくれたりするのだが、水に対する抵抗感は依然として大きいように感じられた。

<M子の様子から気づかされた、教師の指導のあり方>

そのうちに、M子の表情が次第に曇っていくのが感じられた。M子本人の気持ちとしては、「お化け浮きができるようになりたい」という思いはあるのだが、それがなかなかできないという悔しい気持ちや心の葛藤があったことだろう。一方教師は、何とかできるようにさせてあげたい、目標なのだから皆できるようにしてあげなければという思いばかりが先行し、心の中では、つい『なんでできないのだろう』と想着てしまっていた。それだけでなく、『お化け浮きができるようになるには、まずいっぱい顔をつけられるようになって、水の中に顔を入れられるようになるなければいけない』という無言のプレッシャーをM子に与えてしまっていることも感じた。このように、教師からの一方的な指導になっていたことを大いに反省したのである。

<教師の指導の見直しとM子の変化の兆し>

これでは、M子は自信や自己肯定感を無くしてしまうどころか、自らやってみようとする意欲やできるようにしたいという気持ちも下がってしまうことになるだろう。そこで教師は、M子の水に対する抵抗感や怖さを取り除くことができるには、まず楽しく水に親しむ中で、友だちの姿から刺激を受け、自分もやってみようと意欲的になれることが大切だろうと、改めて考え直した。そんな時、ふと周りを見渡すと、それぞれに自分の考え出した技（泳ぎ方）を楽しんでいて、「先生見て！〇〇（ペンギン、ロケット、ラッコ、おばけ等）泳ぎ！」と、ことあるごとに披露するクラスの子どもたちがいた。教師は、その一つひとつを「おもしろいこと考えたね、そんなこともできるようになったんだね！」と感心しながら、大いに認めた。そんな教師と友だちの姿から、M子が自分もやってみたくなるだろう考えたためである。すると、その姿から刺激を受けたようで、M子自身も「先生見て！こんなの考えた！」と言って、自分なりに考えた泳ぎ方を、何度も教師にやってみせる姿が見られるようになった。決して顔をつけているわけではないのだが、M子のできるようになりたくて頑張っていることの表れだと感じられたので、それを認めたり、一緒にやってみたりして共に楽しんだ。こうして、夏休みに入った。



<M子の頑張りやつまづきをクラスの皆で共有する>

夏休み明け（8/23）、休み中に家族で海やプールに行ったことや、お風呂でも毎日顔つけの練習をしたことを嬉しそうに教師に話すM子は、その成果を見てほしい様子だった。いざプールに入ってやってみると、まだ水に対する抵抗感や怖さはあるようだった。それでも、2秒くらいは水に顔をつけられるようになっていて、「前は1（秒）だったけど、2（秒）できるようになったんだね。よく頑張ったね！」と、その成長に共感した。すると、M子は「プールで練習したからかな」と少し得意気であった。ここで、今までの教師であれば「2秒できたのだから今度は3秒に挑戦してみよう」と促していたことだろう。そうではなく、今こそ、クラスの子どもたちが友だちの頑張りに気づいたり、まだ伏し浮きができない友だちがそれに挑戦するのを励ましたりするような機会にできるのではないかと考えた。そこで、その日の帰りの会で、「久しぶりの幼稚園の

プール、楽しかったね。それに、いろんなことができるようになったんだね。でも、まだ水が怖い人いるかな？」と聞いてみた。目標を達成するために苦手なことにも一生懸命に頑張っている友だちがいること、その友だちが何に困っているのかをクラスの皆で共有できるようにするためである。このとき教師には、子どもたちのこれまでの育ちから、できないことがいけないことではないということを実感しているだろう、頑張っている友だちに自分にできることをしてあげようとする友だちが必ずいるだろうという思いがあった。すると、予想通り正直に手を挙げるM子。教師が「そうだね、水の中ってやっぱり怖いよね。でもM子ちゃん、よく頑張ってるんだよね」と話すと、周りの子どもたちは口々に「私は全然怖くないよ！」「大丈夫だよ、こうすれば怖くなくなるんだよ！」等と発言する。「そうか、じゃあどうしたら怖くなくなるのか教えてくれるといいね。みんな教えてあげるの上手だもんね」と話しておいた。

<二人の友だちに支えられて、なんと潜れるようになった！>

翌日のプールの活動において、なんとM子が自分から水に顔をつけている。その隣には、M子の両手を握ってくれているN子とH子がいた。そして、二人は「いっせーの一で！」と合図をして、三人で輪になって手をつないだまま潜ったのである。それは、2・3秒という短い時間だが、M子は手足を伸ばして身体全体で水の中に入り、浮かんできたのである。自分でもびっくりしたようで、嬉しそうに何度もやって見せるM子に、教師は「どうしてできるようになったの？」と聞いてみると「分からない！」と笑顔で答える。「でも怖くなかったの？」と聞くと、「(手を握ってくれて) 一緒なら怖くないから！」とのことだった。一方、N子やH子は「1秒でもいいからやってみよう！」とM子を誘ったようである。さらにN子は、「先生とM子ちゃんが頑張ってるの見てたから。M子ちゃんが(水が) 怖いんだなと思ってた」と話している。また、H子は、その後もいつもM子に付き添ってくれていて、「M子ちゃん5秒できる(潜れる) ようになった！」とまるで自分のことのように報告してくることもあった。普段から仲の良い二人だが、振り返ってみると、プールでも、M子が頑張っている時には常に寄り添ってくれているH子の姿があったことを教師は思い出したのだった。この日の帰りの会において、教師は「今日はこんな嬉しいこと(N子とH子が支えてくれてM子が潜れるようになったこと、今までずっとM子が頑張っていたこと)があったんだよ！」と全体に伝えた。すると、次の日から他の友だちもM子の様子を見て「本当だ。すごいね！よく頑張ったんだね」などと声をかけてくれたり、認めてくれたりする姿が見られたのだった。これによって、M子の自信はより確かなものになったことだろう。

<水と仲良しになってプール遊びが好きになり、心地よさを味わえるようになった！>

こうして、二人の支えにより大きな変化を見せたM子は、二人に「ありがとう」と伝える。H子は笑顔で応え、N子は「友だちだから」と微笑む。二人にとっても自分のおかげで友だちができるようになったという喜びや充実感があったことだろう。そして、初めてできたときは「できたときは魔法みたいだった！」と嬉しそうに振り返るM子は、水がもう怖くないと実感できたことで、その後、「先生見てて！」と、自ら何度も伏し浮きをやってみせたり、イルカショー(水中にある二つのフープくぐり)にも挑戦したりして、それも繰り返し楽しめるようになった。つまり、身体力を抜いて手足を伸ばして水の中を進めるようになった



たのである。また、自分がやってもらったように、今度は**M子**の方から、水を怖がっている友だちの手を握り、伏し浮きを一緒にやってあげようとする姿も見られたのだった。

<考察>

○**お互いに認め合える人間関係** あれほどまでに水を怖がっていた**M子**が、まるで別人のように変わった一番の要因は、**N子**と**H子**の存在だろう。事例にあるように、**M子**自身にできるようになりたいという気持ちはあっても、水面に一瞬しかつけれないくらいの抵抗感があった。その大きな壁を乗り越え、自分からやってみようと思えたのは、二人が手を握ってくれたことによる安心感があったからだろう。そして、力を貸してあげようと自分にできることを積極的に行動に移すことのできる**N子**、あまりリードしたりするわけではないが相手の様子を見ながら優しく寄り添う**H子**、そんな二人に親しみや信頼感を持っている**M子**、このようなお互いの関係性が絡み合い、お互いに認め合える人間関係に育っていたからこそだと言えるだろう。ここで、お互いに認め合える人間関係とは、友だちの良いところや得意なところばかりではなく、課題や苦手なところまで含めて受け入れ合い、自分にできることを相手のためにできるような関係だと考える。

○**毎年受け継がれている『お化け浮き』** 自分の苦手なことに素直に向き合い、できるようになるまで頑張った**M子**には、できるようになりたいという気持ちがずっとあったからこそ、抵抗感を乗り越えられたのだろう。では、**M子**はなぜそのような気持ちを持ち続けることができたのかと言うと、おそらく昨年のプール納めにおいて、年長児が披露してくれた毎年受け継がれている『お化け浮き』が魅力的で、カッコいいな、あんなふうにやってみたいという憧れや目標になっていたからだろう。また、クラスの友だちが楽しそうにやっている姿から、自分もできるようになりたい、一緒に楽しみたいという思いもあったのだろうと考える。

○**教師主導の指導から、友だち同士で高め合えるような指導への転換** できるようになりたい気持ちはあっても、怖くてどうしてもできない、どうやればいいのか分からない、何度やってみても思うようにいかなかった**M子**の様子から教師の一方的な指導を反省し、楽しんでいる周りの友だちからの刺激を受けて、自分からやってみようと感じられるような指導へと転換した。それによって、**M子**は「プール遊びは楽しい」と再認識することができたのだろう。つまり、「プールはもう嫌だ。やりたくない」とはならなかったということである。だからこそ、**M子**は伏し浮きができるようになりたくて、夏休み中、家でも、自ら練習をしていたのだろう。また、**M子**の大きな支えとなった**N子**と**H子**を動かしたきっかけは、**M子**の頑張りやつまづきをクラスの皆で共有できるように教師が取り上げたことだろう。それによって、二人が相手のために自分にできることをしてあげようという気持ちになり、行動に移せることへとつながったのだと考える。ここでも教師主導の指導から、友だち同士で励まし合い、高め合えるような指導へと転換したのである。



このように、プール遊びを通して、これらのことが密接に関連し合って**M子**は抵抗感を乗り越え、プール遊びが好きになり、水の中で思うように身体を動かす心地よさを味わえたのである。

6 研究のまとめ

<成果>

本園の伝統的な運動遊びには、「自ら運動することが好きになり、思うように身体を動かす心地よさを味わう」姿へとつながる以下のような要素が含まれていることに気づいた。

○それぞれの活動目標を持つ

本園の伝統的な運動遊びは、毎年、学年を越えて、数ヶ月から長い活動では一年を通して、長期間にわたって行われている。それも、自由活動時に子どもたちの遊びとして行われるので、クラスや学年を越えて、全園児が自由に見たり、参加したりできる環境である。そのため、それが初めての子どもでも、自分が納得するまで見ることができるので、遊びのやり方や身体の動かし方等のイメージを持ちやすいし、以前に経験している子どもにとっても、友だちの姿を見る機会が持てるので、自分の思いをより具体化しやすい。

さらに、これらの遊びでは、年長の子どもたちの充実した姿を通して、遊びのやり方だけでなく、『遊びのおもしろさ』が伝わりやすいので、初めてでも、自ら興味を持って取り組みやすい。運動遊びでは、年長の子どもの素早かったり、力強かったりする姿、友だちと力を合わせて楽しむ姿等は、年少の子どもたちには、憧れであり、自身の具体的な目標となる。

○お互いに認め合える人間関係の中で、繰り返し遊ぶ

運動遊びは、活動目標を持って取り組んでも、それがすぐに実現できるとは限らない。それは身体的な発達の状況や、運動能力の発達度等によって異なるが、伝統的な運動遊びにおいては、自分の思ったようにすぐにできなくても、諦めてしまわず、何度も繰り返して遊ぶ姿があった。「あんなふうにやりたい」と思って取りかかっても、達成への抵抗感を越えていかなければならない。ひとりだけではできなくても、今の姿を受け入れてくれるクラスの友だちの支えや、その子どもなりの歩みを受容し、励ます教師の存在は欠かせない。幼児の場合は、特に家庭の理解も重要だろう。できる、できないという結果にのみこだわりのではなく、そこに達するまでの経過に着目し、その子どもなりの変化の過程を受容する温かな人間関係が基盤にあってこそ、自己肯定感が強まり、繰り返し取り組みながら抵抗感を乗り越えていくことができると考える。

○一人ひとりの姿に合った柔軟な活動

伝統的な運動遊びは、毎年受け継がれている活動だが、遊びのやり方や身体の動き等は、その時々の子どもの姿によって異なっている。それは、子どもによって遊びのイメージが異なるからであり、教師は、一人ひとりが持っている遊びのイメージを、丁寧に捉えながら、それが実現していく過程を探っていく。毎年行われる活動でも、活動の形態にとらわれず、遊びの形は一人ひとりの子どもが、主体的なイメージ、すなわち活動目標を実現させていく姿である、と捉えることが肝要である。

以上のような要素は、それぞれがばらばらにあるのではなく、相互に関連し合ってこそ、主題に迫るような環境として重要となる。そこで、幼稚園生活では、学年やクラスを越えて、園全体で、このような環境の構成に努めなければならないだろう。

<課題>

本園の伝統的な運動遊びにみられる環境構成を、他の運動遊びの実践でも深めていきたい。